

広島市方言におけるアクセントの継承と変容 (1)

—1拍・2拍・3拍名詞のアクセントの世代的動態—

中 東 靖 恵

1. はじめに

日本語における共通語の普及と方言の変化について、第19期国語審議会最終報告「現代の国語をめぐる諸問題について(報告)」(1993年6月)では、以下のように言及されている。

新聞・雑誌等の出版物、テレビ・ラジオ等の放送、各種の広告など、様々な媒体が人々の言語生活に及ぼしている影響の大きさについては言うまでもない。特にテレビの影響で、いわゆる共通語は全国に通用する言葉として広く普及した。地域で使われる言葉である方言はこれと併存しているが、共通語の影響を受けながら方言自体の変化もまた進行している。(1-3. 社会状況の変化と国語)

様々なメディアによる言語生活への影響の大きさ、とりわけ「テレビの影響」によって共通語が広く全国に普及したこと、その一方で方言の変化が進行しているという現状認識を示した上で、共通語と方言の関係については以下のように述べられている。

現在、共通語は広く一般社会に普及していると認められるが、方言は地域の文化を伝え、地域の豊かな人間関係を担うものであり、それぞれの地域に伝わる豊かな表現を生活の中で生かしていくことは、言語文化の活性化にもつながるものである。共通語とともに方言も尊重することが望まれる。(2-1-4. 方言)

このような国策としての「方言尊重」という方針は、従来の「共通語重視」を180度転換させる画期的なできごとであった(小林1996)。学校教育では、1989年の学習指導要領改訂に伴い、方言の尊重とともに「方言と共通語との使い分け」が奨励された。しかし、方言尊重の背後には、方言の急速な衰退があり、小林(1996:16)は、今後「方言を保護しようという風潮は強まり、方言が文化財として保存される日もくるだろう」と将来を予測した。

言語の衰退・消滅に対する危機意識は、世界では1980年代後半ごろから高まり始め、Krauss(1992)が「21世紀には世界の言語の半分が消滅する」という衝撃的な予測を発表したことを機に、国際機関も危機言語救済プロジェクトに乗り出すことになった(新井2022)。

UNESCOが発表したAtlas of the World's Languages in Danger (Moseley ed. 2010)には、日本の8言語¹⁾が危機言語として掲載され、以後、東日本大震災の被災地の方言も含め、危機言語に関する調査研究・記録保存が文化庁や国立国語研究所のプロジェクトによって進められている。だが今や、日本の全国各地の方言も消滅の危機に瀕する危機言語である(木部2017)。

2. 方言アクセントの変化に及ぼすメディアの影響

共通語が全国に普及し、方言の急速な衰退が進行しつつあった1990年代、広島市方言ネイティブである筆者は、広島市および山陽地方岡山—広島—下関ラインにおける方言アクセントの世代的・地理的動態に関する調査研究に、調査員かつ話者として携わった。

- (1) 広島市方言アクセント調査(馬瀬・小橋・竹田・中東1995) (以下「広ア調査」)
- (2) 『広島市方言アクセント辞典』調査(馬瀬編1994) (以下「広ア辞典調査」)
- (3) 山陽地方岡山—広島—下関ライン方言アクセントグロットグラム調査(馬瀬・竹田・中東1995、馬瀬・中東2003) (以下「グロットグラム調査」)

これらの研究では、言語形成期におけるメディア(テレビ)との接触による言語変化への影響に焦点を当てて調査設計を行い、多世代・多人数を対象に多数の語アクセントについて調査した。その結果、言語形成期の途中ないし初めからテレビとの接触があった世代において、アクセントの共通語化、あるいは、より優勢な共通語・新しい東京語アクセントへの変化が顕著に認められるという方言アクセントの変容の実態を計量的に明らかにした。

その後、上記の研究成果を踏まえ、筆者は(4) 南米パラグアイの日系社会に暮らす広島県人家族(戦後移民1~3世)を対象に同様の手法でアクセント調査を行った。その結果、言語形成期の途中ないし初めから、メディア(インターネット、テレビ、ビデオ、DVD等)を媒体とする日本の日本語との日常的な接触があった世代(1970年以降生まれ)において、アクセントの共通語化、あるいは、より優勢な共通語・新しい東京語アクセントへの変化が顕著に認められ、日本から遠く離れた海外の日系移民社会においても、日本国内で起きているのと同様な方言アクセントの変容が起きているという驚くべき事実が明らかになった(中東2011)。

共通語化に関する大規模調査には、国立国語研究所が山形県鶴岡市で20年おきに計4回(1950、1971、1991、2011年)行った経年調査がある。サンプリング調査とパネル調査により構成されるコウホート系列法が採用されている点で特徴的である(横山ほか2014)。1950年の調査時にテレビはまだなかったが、1953年にテレビ放送が開始され、その後、1970年代にはほぼすべての家庭にテレビが普及・浸透した。1971年に行われた2回目の調査では、音声・アクセントにおいて特に若い年齢層での著しい共通語化の進行が見られた(江川1973)。

だが、鶴岡調査における共通語化とテレビへの接触との関連について、国立国語研究所(1974: 287)は「今回調査では、テレビの視聴時間の長いほど共通語化していないという結果が出ている。テレビのように普及率が高くなると、これは要因としてはあまり働かず、むしろそれにかかわる要因の方が強くきいてくるのであろう」と報告した。

共通語化にテレビ視聴の直接的な影響はないとするこの見解に対し、馬瀬(1981、1996b、

1997) は共通語化におけるテレビの影響を「テレビの視聴時間の長短」で論じたことへの問題を提起した。テレビの視聴時間が長いのは共通語化が遅れる高年層であり、視聴時間の短い若年層では共通語化が進んでいるためである。このような問題意識から、馬瀬(1981)の長野市、静岡市井川での調査、上記(1)～(3)のアクセント調査は、テレビの視聴時間の長短ではなく、言語形成期におけるテレビとの接触の観点から調査設計して行われた。

一方、鶴岡調査では、「見かけ上の時間(apparent time)」²⁾による共通語化の進行だけでなく、実際の時間経過にそった「実時間(real time)」調査による経年観察も行われている。その結果、言語形成期を過ぎた成人でも年齢を重ねるにつれて、アクセントの共通語化が進むことが実証的に明らかにされている(横山ほか2010、横山ほか2014)。

3. 本稿の目的

(1)～(3)のアクセント調査実施から30年が経過した。1990年代後半以後のインターネット、携帯電話の普及、2000年代後半以後のスマホの登場・普及、SNSの利用拡大等により、言語生活やコミュニケーションのあり方は劇的に変化した。全国で共通語化がほぼ完了したことにより、「方言コンプレクス」から「方言prestige」の時代へと、方言の社会的評価は上昇したが(田中2014)、その一方で方言の衰退は激しく、消滅の危機に陥ることになった。

言語を取り巻く社会状況が大きく変化し、方言アクセントもさらに変化したと考えられるが、その後調査の実施には至っていない。とりわけ(1)の「広ア調査」についてはアクセント資料の一部を公開したに留まっており、今後の再調査のためにも、また広島市方言アクセントの記録・保存という観点からも、当時のアクセント資料の全体を公開する必要があると考えた。紙幅の都合で、そのうちの一部を本稿で公開し、残りの資料については別稿に譲る。

4. 広島市方言アクセント調査「広ア調査」の概要

広島市方言アクセントは東京式(中輪式)であり、型の種類は共通語・東京語と同じである。ただし、その音声的相、音韻論的解釈については様々な見方がある(神鳥1977、藤原1978、馬瀬1995、1996a)。「広ア調査」の概要は以下のとおりである。

- (1)調査地域：広島市。ただし、広島県安芸郡府中町・海田町も含めた。
- (2)話者：調査地域生育の1898(明治31)～1981(昭和56)年生の男女159名。
- (3)調査年月：1993年7～8月。以後補充調査を実施。
- (4)調査方法：面接調査。話者に調査項目を含めた短い文(例：もみじがきれいだ。)を、通して2度読んでもらい音声を録音し、下線部のアクセントを記録した。
- (5)調査者：馬瀬・小橋・竹田・中東(1995)の執筆者および(当時の)広島女学院大学文学部学生。
- (6)調査項目：表1に示した138項目を調査した。

表1：「広ア調査」の調査項目一覧

| カテゴリー | 調査項目 | 項目数 |
|-----------|--|-----|
| 1拍名詞 | 葉, 齒, 日, 火 | 4 |
| 2拍名詞 | 上, 嘘, 火事, 汽車, 北, 靴, 熊, 雲, 桑, 匙, ねじ, 端, 橋, 鼻, 花, 服, 槍 | 17 |
| 3拍名詞 | あいつ, 朝日, 頭, 命, うさぎ, 男, 覚悟, き, の, こ, 心, 小判, 桜, 涙, にしん, めがね, もみじ | 15 |
| 4拍名詞 | 足音, 金持ち, 神様, 直径, 年寄り, の, こぎり, プランコ, ものさし | 8 |
| 地名 | 呉, 讃岐, 鳥取, 萩, 山口 | 5 |
| 外来語 | コップ, スクーター, テレビ, トースト(の), トースト(を), ドラマ, バイク(の), バイク(に), バレー(の), バレー(を), パレエ(の), パレエ(を), マージャン, メーカー, モデル(の), モデル(に), ラジオ, リレー(の), リレー(を), レモン(の), レモン(を) | 21 |
| 疑問語 | 誰, どこへ, どこへも, 何も, 何を, なぜ | 6 |
| 数詞+助数詞 | 1月, 4月, 6月, 10月, 2円, 5枚 | 6 |
| 尾高型名詞+「の」 | 花の色, 橋の上, 男の人 | 3 |
| 姓名 | 池田誠子, 武田順子, 武田信玄, 武田鉄矢, 原節子, 原孝子, 原辰徳, 森京子, 森進一 | 9 |
| 動詞 | いる, おる, 取らない, 書かない, 来ない, 聞かない, 取らなかった, 聞かなかった, (槍で)突いた, (嘘を)ついた, 取り出す, 掃き出す, 思い出す | 13 |
| 形容詞 | 赤い, 厚い, 黒い, 暑い, 赤い(実), 厚い(本), 黒い(髪), 暑い(夏), 赤い(のを), 黒い(のを), 赤かった, 厚かった, 黒かった, 暑かった, 赤くなる, 厚くなる, 黒くなる, 暑くなる, 赤うなる, 厚うなる, 黒うなる, 暑うなる, 赤ければ, 厚ければ, 黒ければ, 暑ければ | 26 |
| その他 | なかなか(来ない), 毎日(行く), 初めて(会う), 馬鹿にする, ありがとう | 5 |
| | 合計 | 138 |

5. 広島市方言アクセントの継承と変容：

1拍・2拍・3拍名詞アクセントの世代的動態

5.1 話者の世代区分

「広ア調査」では、馬瀬(1981)に従い、話者を生年によって12年ごとに区切り、第Ⅰ～Ⅶ世代の7つに区分して分析を行った。表2に世代区分と各世代の人数を示す。この世代区分は、以下の馬瀬(1981)の作業仮説に基づいて設定されたものである(馬瀬1997：152)。

ある地点の言語を年齢の軸でとらえた場合、共通語化という観点からみて高年層から若年層にかけての共通語化が予想される。だが、それは無論一本の直線で示されるような単純なものではなからう。高年層からある年代層までのごくゆるい上昇カーブが、それ以後の世代において急激な上昇カーブに転じたとしよう。もし、後者の上昇カーブを描いた年代層とテレビの普及した時代に言語形成期を迎えた年代層(中略)とが一致するならば、他に有力な理由が重ならないときは、それはテレビの影響によるものだと推定できる蓋然性が高いと考える。

この作業仮説には、個人の受ける外からの言語的影響は言語形成期に極めて大きく、言語形成期を過ぎた者においては比較的小さいという前提がある。

広島市のテレビの普及は1955(昭和30)年頃に始まり、(当時の)皇太子殿下(現在の)上皇陛下)ご成婚の1959(昭和34)年にピークを迎え、東京オリンピックが開催された1964(昭和39)年でほぼ完了する。言語形成期を3、4歳～13、4歳とすると、1946(昭和21)年に始まる第Ⅴ世代は言語形成期の途中で、第Ⅵ世代以降は言語形成期の初めからテレビに接した世代となる。言語形成期が終わってからテレビに接する第Ⅰ～Ⅳ世代よりも、言語形成期の途中ないし初めか

らテレビに接する第V世代以降の話者で、方言アクセントの急速な共通語化、あるいは、より優勢な共通語・新しい東京語アクセントへの変化³⁾が起こることが予想される。

以下では、「広ア調査」で得られたデータに基づき、広島市方言における1拍・2拍・3拍名詞のアクセント(表1

参照:36項目)を世代的動態の観点から分析する。その際、必要に応じて「広ア辞典調査」「グロットグラム調査」での研究成果も参照する。

表2：話者の世代区分と人数

| 区分 | 生年 | 人数 |
|--------|------------------------|-----|
| 第I世代 | 1898(明治31)～1909(明治42)年 | 4 |
| 第II世代 | 1910(明治43)～1921(大正10)年 | 23 |
| 第III世代 | 1922(大正11)～1933(昭和8)年 | 17 |
| 第IV世代 | 1934(昭和9)～1945(昭和20)年 | 31 |
| 第V世代 | 1946(昭和21)～1957(昭和32)年 | 27 |
| 第VI世代 | 1958(昭和33)～1969(昭和44)年 | 23 |
| 第VII世代 | 1970(昭和45)～1981(昭和56)年 | 34 |
| | 合計 | 159 |

5.2 1拍名詞

1拍名詞については、図1～図4に示す4項目を調査した。調査文は以下の通りである。

1. 葉が茂る。
2. 日が出る。
3. 歯が痛い。
4. 火が出る。

各図において、横軸は世代、縦軸は発音の割合(%)、グラフ中の数字はアクセント核の位置を語頭から数えた拍数によって示したものである(以後同じ)。

どの世代においても、「葉」「日」は平板型(0)、「歯」「火」は頭高型(1)が優勢であり、大きな世代的変動は見られず、高年層の伝統的な方言アクセントが若年層に継承されている。これらはいずれも共通語・東京語でも同じアクセント型の語である。ただし、若年層では「葉/歯」「日/火」の区別がはっきりしているが、高年層では「葉」「日」に頭高型、「歯」「火」に平板型が出現している話者もいる。同様な傾向は「グロットグラム調査」でも確認される。

また、「広ア辞典調査」の最高齢話者(1907(明治40)年生まれ)では「歯」のアクセントに平板型が現れている。神鳥(1977:654)は、広島県地域方言で「歯」のアクセントがゆれているとし、「中年層以下では「ハ」ガのように●の型をとることが多いのに対して、老年層では「ハ」ガのように○の型をとっていることが多い」と述べている。

5.3 2拍名詞

2拍名詞については、図5～図21に示す17項目を調査した。調査文は以下の通りである。

5. 汽車に乗る。
6. 端を通る。
7. 橋を渡る。
8. 鼻が赤い。
9. 花が咲く。
10. 上を見る。
11. 北を見る。
12. 匙ですくう。
13. 雲が多い。
14. 桑を摘む。
15. 嘘をついた。
16. 火事になる。
17. 時計のねじを巻く。
18. 熊がおる。
19. 槍で突いた。
20. 靴をはく。
21. 服を着る。

図5～図9に示した「汽車」「端」「橋」「鼻」「花」はどの世代でも、「汽車」:頭高型(1)、「端」⁴⁾「鼻」:平板型(0)、「橋」「花」:尾高型(2)が優勢であり大きな世代的変動は見られず、高年層の伝統的な方言アクセントが若年層に継承されている。「汽車」以外はいずれも共通語・東京語でも同じアクセント型である。

「汽車」は共通語・東京語では「キ」の母音が無声化するため、ピッチの下がり目が後ろにずれて尾高型となる（NHK編 2016）。広島市方言では母音の無声化は起こりにくいため、頭高型であり、「広ア辞典調査」でも9名の話者全員が頭高型である。ただし、近年、共通語・東京語ではアクセント変化が見られ、NHK編（1985）、秋永編（1981）では尾高型のみであったが、その後編纂されたNHK編（1998、2016）、秋永編（2001、2014）では、母音の無声化が起こる拍にアクセント核が置かれた頭高型が収録されている。

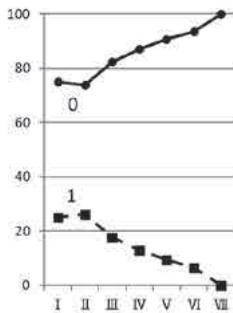


図1 「葉」

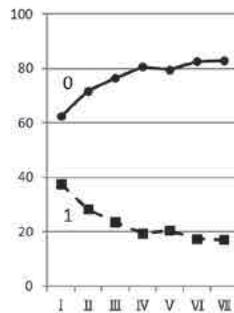


図2 「日」

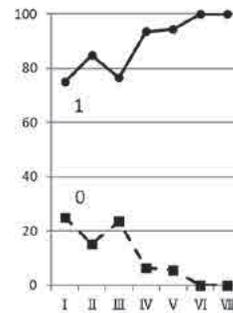


図3 「歯」

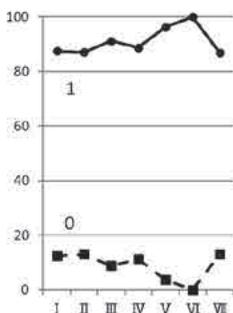


図4 「火」

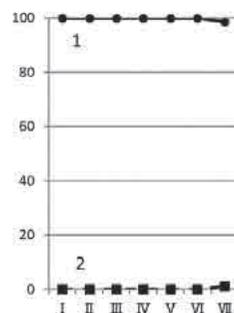


図5 「汽車」

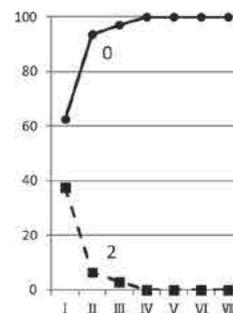


図6 「端」

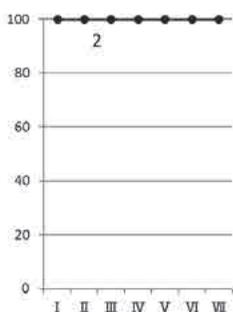


図7 「橋」

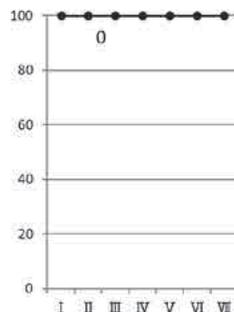


図8 「鼻」

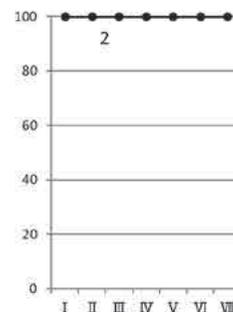


図9 「花」

図10～図21に示した12語には大きな世代的変動が見られ、多くの語でアクセントの新旧交代が認められる。「上」「北」は尾高型(2)＞平板型(0)、「匙」「雲」「嘘」「火事」「ねじ」「熊」「靴」「服」は尾高型(2)＞頭高型(1)、「桑」は尾高型(2)ないし平板型(0)＞頭高型(1)に変容し、「槍」

は平板型(0) > 尾高型(2)に変容しつつある。

このうち「上」「雲」「桑」「嘘」「火事」「ねじ」のアクセント変動は共通語化である。「雲」「桑」は第IV世代で、「嘘」「火事」「ねじ」では第V世代で新旧アクセントが交代する。「上」では少し遅れて第VI世代以降で交代するのには、共通語で「上」は平板型だけでなく、「～の上」の場合は尾高型であることが関係しているだろう(馬瀬・竹田・中東1995)。

「北」「匙」「熊」はいずれも新しい東京語アクセントへの変化であるが、「北」はより優勢な共通語アクセントへの変化でもある。1980年代の東京語の調査で、すでに「北」は2 > 0、「匙」「熊」は2 > 1(馬瀬1983、馬瀬・佐藤編1985)へと変化している。広島市方言において、「北」「熊」のアクセントが第V世代で新旧交代するのに対し、「匙」で新旧交代が遅れるのには、日常生活で「匙」を用いることが少なくなっていることも関わっているだろう⁵⁾。

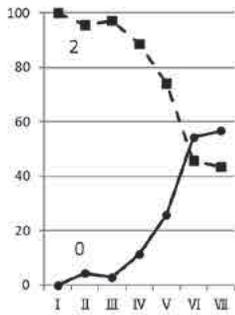


図10 「上」

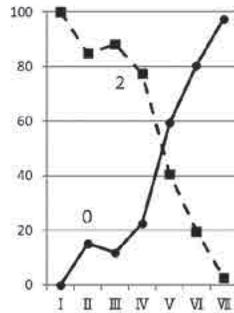


図11 「北」

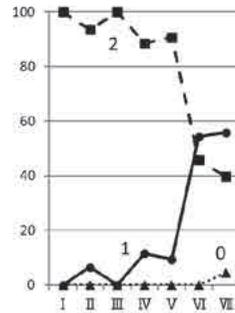


図12 「匙」

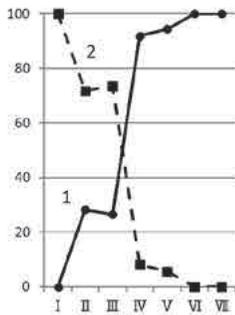


図13 「雲」

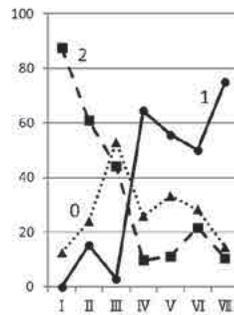


図14 「桑」

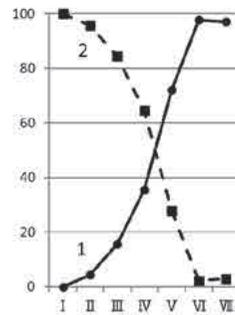


図15 「嘘」

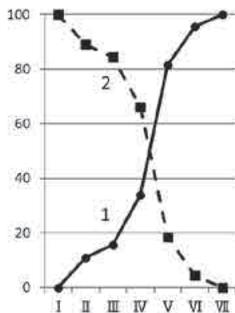


図16 「火事」

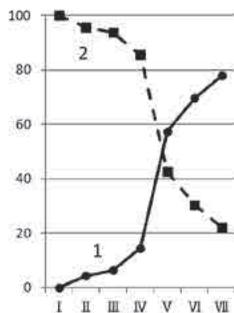


図17 「ねじ」

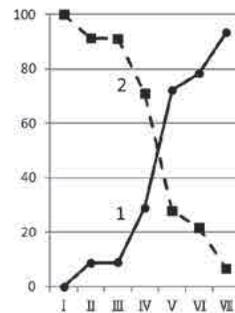


図18 「熊」

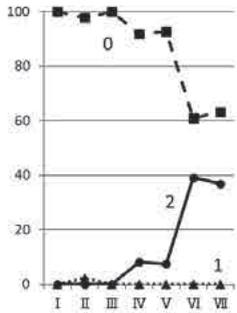


図19 「槍」

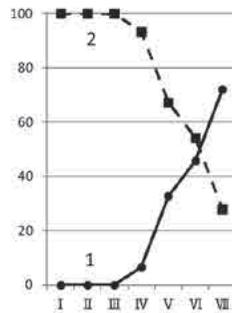


図20 「靴」

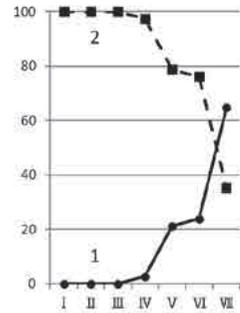


図21 「服」

「槍」の尾高型の増加は、「グロットグラム調査」「広ア辞典調査」でも若年層に見られるが、共通語・東京語では平板型のみである。ただし馬瀬・竹田・中東(1995)によれば、0>2へのアクセント変化は首都圏出身の大学生に起こっているとされる。

「靴」「服」の2>1への変容は「グロットグラム調査」「広ア辞典調査」でも見られるが、共通語・東京語アクセントへの変化ではない。馬瀬・竹田・中東(1995)で言及されているように、これには広島近隣地域(岡山・山口)からの影響や、広島市方言では「靴」「服」の語頭拍で母音の無声化が起こりにくいことも関わっているだろう。

「槍」「靴」「服」で、アクセントの変容が少し遅れて第VI～VII世代で進行するのには、これらが共通語・東京語アクセントへの変化ではないことが関係しているだろう。

5.4 3拍名詞

3拍名詞については、図22～図36に示す15項目を調査した。調査文は以下の通りである。

- 22. うさぎが跳ねる。23. 男がいる。24. 桜が咲く。25. 頭が痛い。26. 心がはずむ。
- 27. あいつは馬鹿だ。28. 朝日が出る。29. 命がのびる。30. 覚悟をする。
- 31. きのを採る。32. 土の中から小判が出る。33. 涙が出る。34. にしんを焼く。
- 35. めがねをかける。36. もみじがきれいだ。

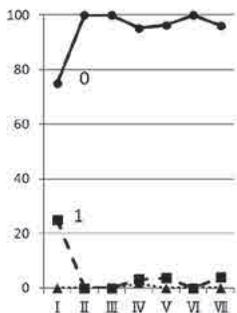


図22 「うさぎ」

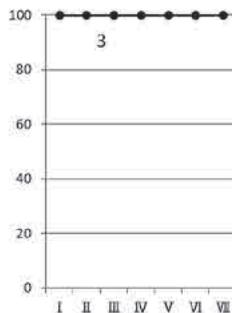


図23 「男」

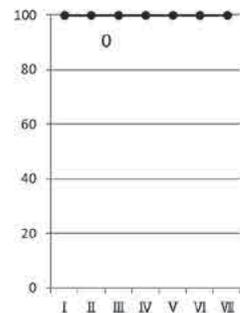


図24 「桜」

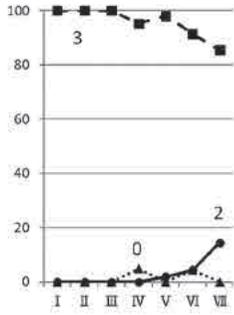


図25 「頭」

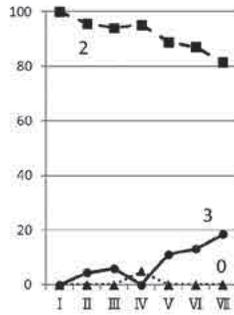


図26 「心」

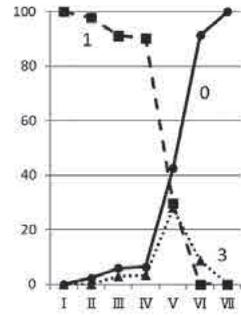


図27 「あいつ」

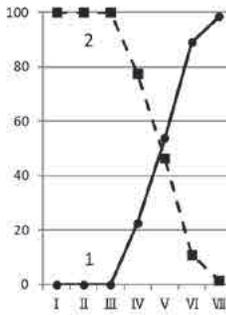


図28 「朝日」

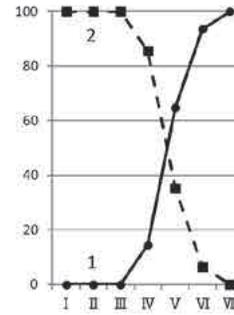


図29 「命」

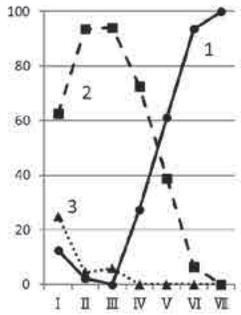


図30 「覚悟」

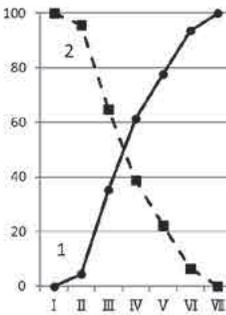


図31 「きのこ」

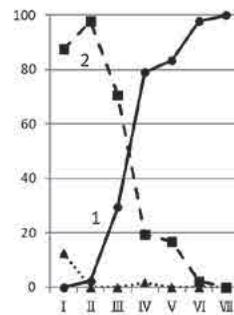


図32 「小判」

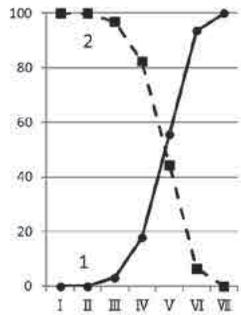


図33 「涙」

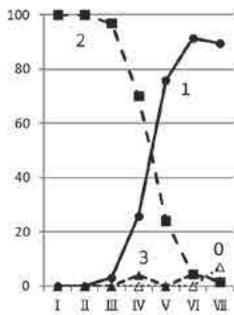


図34 「にしん」

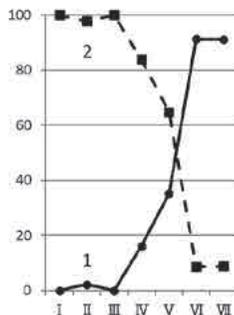


図35 「めがね」

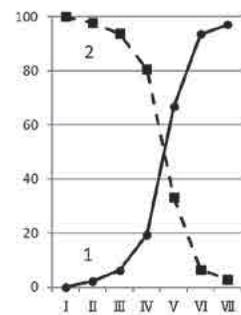


図36 「もみじ」

図22～図26に示した「うさぎ」「男」「桜」「頭」「心」はどの世代においても、「うさぎ」「桜」：平板型(0)、「男」「頭」：尾高型(3)、「心」：中高型(2)が優勢であり、伝統的な方言アクセントが継承されている。いずれも共通語と同じアクセント型の語である。

「うさぎ」の頭高型は「グロットグラム調査」において広島県内の数地点で散見される。また、若年層で微増している「頭」の中高型、「心」の尾高型は新しい東京語アクセントであり、現在はNHK編(1998、2016)で第1アクセントに併記される共通語アクセントである。

図27～図36に示した10語には大きな世代的変動によるアクセントの新旧交代が認められる。「あいつ」は頭高型(1)＞平板型(0)、「朝日」「命」「きのこ」「小判」「涙」「にしん」「めがね」「もみじ」は中高型(2)＞頭高型(1)に変容しており、これらはすべて共通語化である。「覚悟」における中高型(2)ないし尾高型(3)＞頭高型(1)の変容は、より優勢な共通語アクセントへの変化である。

「きのこ」「小判」は第Ⅳ世代で、「あいつ」「朝日」「命」「覚悟」「涙」「にしん」「もみじ」では第Ⅴ世代で、「めがね」では第Ⅵ世代で新旧アクセントが交代する。これと同様のアクセントの世代的な変容は「グロットグラム調査」「広ア辞典調査」でも確認される。

5.5 広島市方言アクセントの継承と変容

以上、広島市方言における1拍・2拍・3拍名詞のアクセントについて世代的動態の観点から分析した。広島市方言アクセントの継承と変容のパターンは以下のようにまとめられる。

(1)アクセントの世代的変動が(ほとんど)見られない語

(1-1)共通語・東京語アクセントと同じ型である語

1拍名詞：「葉」「日」「歯」「火」、2拍名詞：「端」「橋」「鼻」「花」、

3拍名詞：「うさぎ」「男」「桜」「頭」「心」

(1-2)共通語・東京語アクセントと異なる型の語

2拍名詞：「汽車」

(2)アクセントの大きな世代的変動が見られる語

(2-1)共通語化・より優勢な共通語・新しい東京語アクセントへ変化する語

2拍名詞：「上」「雲」「桑」「嘘」「火事」「ねじ」「北」「匙」「熊」、

3拍名詞：「あいつ」「朝日」「命」「覚悟」「きのこ」「小判」「涙」「にしん」
「めがね」「もみじ」

(2-2)共通語・東京語アクセントへの変化ではない語

2拍名詞：「槍」「靴」「服」

広島市方言において(1)アクセントの世代的変動が(ほとんど)見られない語の多くは、広島市方言が(1-1)共通語・東京語アクセントと同じ型である語である。そのため、今後も方言アクセントは継承されていくと考えられる。「頭」の中高型、「心」の尾高型は、現在 共通語アクセントとしてNHK編(1998、2016)に記載されていることから、今後、広島市方言においても増加していく可能性がある。

(1-2) 共通語・東京語アクセントと異なる型の語に分類される「汽車」の頭高型は、現在すでに共通語・東京語としてアクセント辞典に記載されていることから、今後も引き続き広島市方言の頭高型は継承されていくだろう。

広島市方言において(2)アクセントの大きな世代的変動が見られる語の多くが、(2-1)共通語化・より優勢な共通語・新しい東京語アクセントへ変化する語であり、言語形成期の途中あるいは初めからテレビに接する第V～VI世代以降で急速に起こっていた。すなわち、言語形成期におけるテレビの接触が、広島市方言アクセントの変容に大きく関わっていると考えることができる。また、ほとんどの語で、第VII世代においてアクセント変化がほぼ完了していることから、今後、この変容したアクセントが継承されていくことが予想される。

一方、(2-2)共通語・東京語アクセントへの変化ではない語については、今後もアクセント変化が進行していくのか、あるいは止まってしまうのかはまだ分からない。

6. おわりに

方言アクセントの共通語化におけるテレビの影響については否定的な意見もあるが(塩田2016)、冒頭に示した国語審議会報告にもあるように、共通語の普及と方言の変化・衰退にテレビが大きく影響していることは多くの人が認めるところであろう。

一方で、その具体的なメカニズムは分からないことも多く、また、現在のように多様なメディアに囲まれ、メディアを通じて共通語だけでなく様々な地域方言に日常的に触れることのできる生活環境の中で、方言アクセントは今後どのように継承され、変貌していくのだろうか。

今後、広島市での再調査の必要性はあるが、言語生活が30年前と大きく変化した今、具体的にどのような調査を行えばよいのか、調査内容・方法論も含めて改めて検討する必要がある。

注

- 1) アイヌ語、八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の8言語。アイヌ語以外は、一般に日本では「○○方言」と呼ばれることが多い。
- 2) 「言語形成期に習得した言語体系が現在の言語使用に反映されているという仮定のもと、1回の共時的調査から過去の言語使用の姿を通時的に推定しようとする」言語変化研究の方法(横山ほか2014: 242)。
- 3) 共通語アクセントはNHK編(1985)、東京語アクセントは秋永編(1981)、馬瀬(1983)、馬瀬・佐藤編(1985)に基づくこととし、必要に応じてNHK編(1998、2016)、秋永編(2001、2014)も参照する。「より優勢な共通語アクセント」とはNHK編のアクセント辞典に複数のアクセントが記載されている場合、先に示されている「共通語アクセント」としてよりふさわしいと思われる」アクセントを指す。
- 4) 「端」で第I世代に尾高型が出現しているが、「広ア辞典調査」では出現していないことから、話者が「橋」と混同した可能性がある。
- 5) NHK編(2016)では、それまで尾高型の次に記載されていた「匙」の頭高型が第1アクセントとなり、それまで記載のなかった「熊」の頭高型が尾高型に併記された(太田・東2016)。

参考文献

- Krauss, Michael. 1992. The World's Languages in Crisis. *Language*, 68 (1): 4-10.
Moseley, Christopher (ed.). 2010. *Atlas of the World's Languages in Danger*, 3rd edn. Paris, UNESCO

- Publishing.
- <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000187026> (2025年9月30日閲覧)
- 秋永一枝編(1981)『明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂
- 秋永一枝編(2001)『新明解日本語アクセント辞典』三省堂
- 秋永一枝編(2014)『新明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂
- 新井典子(2022)「世界の言語の現在と未来への見取り図—言語データベース『エスノログ』のデータを手がかりとして—」『国際開発学研究』22(1)：1-34.
- 江川清(1973)「最近二十年間の言語生活の変容—鶴岡市における共通語化について—」『言語生活』257：56-63.
- NHK編(1985)『NHK編日本語発音アクセント辞典 改訂新版』日本放送出版協会
- NHK編(1998)『NHK日本語発音アクセント辞典 新版』日本放送出版協会
- NHK編(2016)『NHK 日本語発音アクセント新辞典』NHK出版
- 太田眞希恵・東美奈子(2016)「18年ぶりの改訂で誕生『NHK日本語発音アクセント新辞典』—アクセント記号や見出しの立て方も一新—」『放送研究と調査』66(7)：2-13.
- 神島武彦(1977)「言語地域—発音の特色—」『広島県史 地誌編』広島県：644-705.
- 木部暢子(2017)「言語・方言が消えていく」『国語研ことばの波止場』1：5.
- <https://kotobaken.jp/wp-content/uploads/2018/02/digest-v01.pdf> (2025年9月30日閲覧)
- 国立国語研究所(1974)『地域社会の言語生活—鶴岡における20年前との比較—』秀英出版
- 小林隆(1996)「現代方言の特質」『方言の現在』明治書院：3-17.
- 塩田雄大(2016)「方言とマスコミ」『はじめて学ぶ方言学』ミネルヴァ書房：253-262.
- 田中ゆかり(2014)「「方言」が価値をもつ時代：StigmaからPrestige、そして…」『都市問題』105(8)：9-17.
- 中東靖恵(2011)「パラグアイ日系社会におけるアクセントの継承と変容—パラグアイの広島県人家族を対象に—」『社会言語科学』13(2)：72-87.
- 藤原与一(1978)「広島弁の語アクセント」『音声学会会報』158：16-19.
- 文化庁「現代の国語をめぐる諸問題について(報告)」(第19期国語審議会最終報告)
- https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/19/tosin02/01.html (2025年9月30日閲覧)
- 馬瀬良雄(1981)「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125：1-19.
- 馬瀬良雄(1983)「東京における語アクセントの世代的推移」井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究(昭和57年度科学研究費補助金研究成果報告書)』：93-142.
- 馬瀬良雄編(1994)『広島市方言アクセント辞典』中野出版企画
- 馬瀬良雄(1995)「広島市方言アクセント—アクセントの型と音声的相を中心に—」『フェリス女学院大学国文学論叢』フェリス女学院大学国文学会：1-20.
- 馬瀬良雄(1996a)「広島市方言アクセント—音韻論的解釈を中心に—」『言語学林1995-1996』三省堂：371-393.
- 馬瀬良雄(1996b)「テレビと地域語の変容」『日本語学』15(10)：13-27.
- 馬瀬良雄(1997)「放送音声が地域言語の音声に与える影響について」『諸方言のアクセントとイントネーション(日本語音声1)』三省堂：143-179.
- 馬瀬良雄・小橋裕恵・竹田由香里・中東靖恵(1995)「広島市方言における語アクセントの動態」『音声学会会報』210：4-15.
- 馬瀬良雄・佐藤亮一編(1985)『東京語アクセント資料(上・下)』(文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集)
- 馬瀬良雄・竹田由香里・中東靖恵(1995)『山陽地方岡山—広島—下関ライン方言アクセントグロットグラム(地理年代言語図)集—資料と分析—』フェリス女学院大学馬瀬研究室
- 馬瀬良雄・中東靖恵(2003)「言語地理学の新しい展開—グロットグラムの方法とその実践—」『孫宗光先生喜寿記念論文集：日本語言与文化』北京大学出版社(中国)：13-34.
- 横山詔一・真田治子(2010)「言語の生涯習得モデルによる共通語化予測」『日本語の研究』6(2)：31-45.
- 横山詔一・中村隆・阿部貴人・前田忠彦・米田正人(2014)「成人の同一話者を41年間追跡した共通語化研究」『計量国語学』29(7)：241-250.